

## 貴顕哀悼

### —ボレスワフ勇敢王，オリガ大公妃と聖徳太子の場合—

土谷直人

筆者は、東京大学、東京大学比較文学比較文化大学院にて、木村彰一教授の講義演習授業の末席に連なった者である。ここに 40 年程前の講義演習風景を思い出し、以下の文章を草するものである。40 年程前の教養学部教養学科ロシア分科の講義演習、大学院の講義演習も、今から考えると古き良き教養教育の時代に属して居り、例えば、筆者の記憶では、学部時代は、『ロシアの文学』で、プーシキンの「コーカサスの捕虜」や「ジプシーの群れ」を、また大学院時代はロモノーソフの「ガラスの効用について」などを、学生に分担発表をさせながら、翻訳の誤りを木村先生が丁寧に訂正し、補足を加えて行くというスタイルであった。こちらの学生は、初等文法を終えた程度のロシア語読解力であったから、先生は随分とやり辛かったに違いないが、我々は先生の名訳に感心しながら、一步でも老師の教養に追いつこうと、先生の出題された課題などに答えながら、自己研鑽に励んだ。40 数年の時空を超えて、プーシキンの主人公の台詞や、詩歌の一節を相変わらず記憶しているのは、ひとえに木村教授に対する畏敬の念が成せる技である。

この小文では、偶偶、ボレスワフ勇敢王の逝去に俟つわる哀悼の詩（ガルス・アノニムスの年代記にラテン語で書かれた物を、19 世紀の作家クラシェフスキがポーランド語に翻訳したもの）を、最近入手したこともあり、それと、オリガ大公妃の逝去に関するロシアの歴史家カラムジンの文章、最後に『日本書紀』の聖徳太子の条を取り上げ、ポーランド、ロシア、日本の貴人を悼む作法を比較対照してみたい。

まず、ボレスワフ勇敢王の崩御に関して、クラシェフスキは次のように書いている。

ガルス・アノニムスは、ボレスワフの崩御に関して、あらゆる国民が、偉大な王の崩御に心を痛め、嘆き悲しんだ、と語っている。そして彼自身も年代記に挽歌を載せているが、それは民謡のような感じを抱かせる。ガルスは、あたかもそれを自分の物の様に歌っている。本格的本質的に語法は驚嘆すべきであり、あたかも古い民謡のような特徴を持っているが、ここではラテン語からポーランド語への翻訳でお目にかけよう。

Wszelkiego wieku, stanu,  
Płci niech człowiek bieży,  
Bolesława króla pogrzeb

年齢，職業，地位，性を問わず，  
人々よ駆けつけよ，  
ボレスワフ王の葬礼を悲しみを持って

Z żalością otoczcie.  
A śmierci męża tak wielkiego  
Razem płaczcie ze mną.

取り囲むべし。  
かくも偉大な王の死を  
我と共に悼むべし。

A! a! królu Bolesławie,  
Kędy chwała twoja?  
Kędy cnota? gdzie ozdoba?  
Gdzie bogactwa twoje?  
Płakać po nich nam zostało!  
Biadaż Polsko! biada!

ああ！ ああ！ ボレスワフ王よ、  
御身の賞賛は何処。  
徳は、誉れは何処。  
御身の富は何処。  
我らに残るはそれを思つて泣くばかり。  
哀れなポーランド！ 哀れだ！

Podźwignijcie padającą  
Z boleścią, panowie!  
Ból podzielcie, użalcie się,  
Proszę, biednej wdowie...  
A widzicie, jak spłakana  
Jestem, goście moi!

痛苦を持つて、男達よ、倒れんとする  
ポーランドを持ち上げよ！  
哀れな寡婦の、痛ましさを  
分かち合い、伝え合つてくれ給え.....  
我が客人達よ！ どんなに  
悲嘆に泣き暮れるか、見てくれ給え。

Jakim bolem, jakim płaczem  
Boleją kapłani!  
Tracą siłę, zmysły tracą,  
Prztomność hetmani,  
A duchowni, jak lud cały,  
I nader stroskani.

如何なる痛み、如何なる涕泣を持つて  
司祭達は嘆いているか！  
軍司令たるヘトマン達は、  
力を、理性を、意識を失い  
また僧職は皆、全国民同様  
気懸かり、心配極まりぬ。

Wy, co na cny znak rycerstwa  
Łańcuchy nosicie,  
Wy, co szatyście królewskie  
W każdy dzień mieniali,  
Razem wszyscy okrzyknijcie:  
Biada nam dziś, biada!

高貴な騎士階級の目印の  
鎖を着けたあなた方  
日々王族の着物を  
取り替えている貴顕方  
皆と共に悼むべし。  
今日は哀れな、哀れなわれら。

I wy, panie, co korony  
Nosiliście złote,  
Wy, co suknie z złotogłowiu  
Miałyście i srebra,  
Zrzućcie szaty, a żałobę  
Nadziejcie wełnianą.

黄金の冠を  
冠る貴顕淑女の皆々様  
金頭付きの着物  
銀製品を持つ皆々様  
華美な服を捨て、質素な  
哀悼の喪服を着ん。

A! a! królu Bolesławie,  
Po cóż ty nas rzucił?  
Boże! czemuś śmierć dopuścił  
Na męża takiego!  
Czemuś raczej razem wszystkich  
Nas na pastwę nie dał?

ああ！ ああ！ ボレスワフ王よ！  
何故に、我らを見捨て給う。  
神よ！ 何故にかくなる王に  
死を許され賜うや？  
何故に一緒に我らすべてを  
連れ給わずや。

Cała ziemia utrapiona,  
Po swym królu wdowa.  
Jak dom pusty, kiedy pana  
Swojego pochowa,  
A płacząc go, myśl się tuła  
I bezsilna błąka.

国内一円喪失の極み  
主を失い寡婦となる。  
一家の主人を葬った  
空虚な家の様に  
彼を嘆き、思いはさすらい  
脱力嵩じ当ても無く惑い行く。

Męża tego pogrzeb ze mną  
Płacz człowiecze wszelki:  
Bogacz, nędzarz, żołnierz, kapłan,  
Nad wszystkich ziemianie  
I Lechici i Słowianie,  
Tej ziemi mieszkańce.

王の葬礼、我と共に  
あらゆる人々よ泣き喚け、  
金持ちも、貧乏人も、兵士も、神父も、  
地上のすべての土地持つ人よ  
レヒット人もスラヴ人も  
この土地の全ての住民よ。

A ty co czcisz(czytasz), dobrej woli  
Ktośkolwiek człowiecze,  
Proszę, niechaj cię pobożność  
Łzy wylać poruszy...  
Bo nie ludzkim byłbyś, człecz,

誰彼問わず、善良にして  
弔い、読経する君よ、  
敬神の念篤きにより  
涙を流させ給うべし...  
もしも我と共に泣かぬなら

Plakać nie chcąc ze mną.

それは、君、人間ではないのだから。

(土谷直人訳)

ボレスワフ勇敢王(992-1025)は、今更言うまでもないが、チェコの公女との結婚を機に、ポーランドにキリスト教を導入した父ミェシュコ1世の死により後を継いで992年に即位する。彼が勇敢王と名付けられる契機となったのは、即位にあたり、義理の母と弟たちの策謀を打ち砕く勇氣大胆さがあったからであろう。「彼は、父親を一回り大きくした感があった。父親の知性と抜け目無さを持ち、勇氣と不敵さは百倍」(クラシェフスキ)持っていた。彼は、ポーランド公国の領土を画定し、在位中に領土を主として南方、東方、西方に拡大した。神聖ローマ皇帝オットー3世と同盟を結んで関係を強化し、オットー3世は1000年に首都ポズナニ郊外のグニェズノを訪問してボレスワフ1世と会談、ボレスワフ1世に神聖ローマ帝国の貴族の称号と冠を授け、グニェズノに大司教座を置くことに合意した。この意義に関して、19世紀の作家クラシェフスキは、「この事件が起きたのは正に記念すべき1000年、つまり全世界が崩壊と終末を固唾をのんで見ていた年であった。同時にまたこれこそは、ポーランド独立の誕生の年でもあった」、と書いている。<sup>1</sup> 序でながら、当時ヨーロッパでは、キリスト死後1000年にこの世界が崩壊するとの末法終末思想が在った。この時に、ボレスワフは王として戴冠したと考える者もいるが、一般的には彼の死の直前1025年に戴冠したと考えられている。邪馬台国の卑弥呼が、倭の大国として、より権威ある「王」号を欲し、「親魏倭王」を獲得した様に、ボレスワフも「王」号を獲得したかったのであろう。

このポーランド王の崩御に際し、上に掲げた追悼詩が、ガリア出身の初めてのポーランド年代記作者ガルス・アノニムスによって1115年頃に完成された『ポーランド年代記』に収められている。私は、原文のラテン語文を見ていないが、恐らくラテン語の修辞法を概ね守っているのであろう、と推察される。とは言え、やはりポーランド的な現実も反映されていると大方の読者は首肯されるに違いない。国全体が主を失い寡婦となった様を、まるで「古い民謡」のような語法で語ったと評価するのは、クラシェフスキであるが、すでにしてポーランド固有の民謡があり、ガルスもそのような歌謡形式を取り入れたであろうと推察される。因みに、第9連に歌われているように、グニェズノとポズナニを中心とする、大ポーランド地方の新興国家に、主な部族、種族の構成要素としてレヒット人がスラヴ人と区別されて認識されているのも注目される。

---

<sup>1</sup> J. I. Kraszewski, *Wizerunki książąt i królów polskich* (Warszawa: Nakład Geberthnera i Wolffa, 1888), pp. 20-22.

次に、19世紀ロシアの歴史家カラムジンが10世紀のキエフ・ロシアの傑出した政治家であるオリガ大公妃の事績をどのように語り、彼女の死をどのように哀悼しているかをみてみよう。<sup>2</sup>

(息子のスヴァトスラフが、首都をキエフから、ドナウ河畔のペレヤスラーヴィエツに遷都することを告げた後で、)

悲しみに満ちた母は、老いと病が彼女の命を縮めるのを遅らせないことを祈ると息子に向かって答え、「私を葬った後、どこになりと行くが良い」と彼女は言った。これらの言葉が予言となった。オリガは、3日後に死んだ。彼女は異教的追善を行うことを禁じ、自分の選んだ場所で、キリスト教の僧によって葬られた。息子、孫たち、及び善良なる国民が彼女の崩御を嘆き悲しんだ。

伝説の類いは、オリガを狡猾なオリガと呼び、教会は聖なるオリガと呼び、歴史は賢明なオリガと呼んだ。ドレヴリャーネ族に復讐した後、自国の静謐と、スヴァトスラフの成人まで、他民族との平安を保つことが出来た。偉大な夫の事業と共に、彼女は広大で新しい国土を経営した。法令は、恐らく、書かなかったが、しかし、市民的共同体の青春期の人々に必要な最も簡便で最も必要な規約法規則の類いは、これを与えた。オリガ時代まで、大公達は戦ったが、彼女は統治した。彼女の賢明さに気づいていたスヴァトスラフは、自分の剛勇時代を戦争に明け暮れており、首都を留守にしていたので、内政を彼女に任せていたように思われる。オリガの統治時代にロシアはヨーロッパの最も遠い国々にも知られる様になった。ドイツ人の年代記作者は、彼女のオットー1世に対する駐ドイツ大使館について語っている。恐らく、ロシアの公爵夫人は、オットー一族の名声と勝利を知って、彼にも彼女の国民の名声を知って欲しかったのであろう。そして自前の大使を通じて友好的同盟を提案した。最後に、ネストルの表現によれば「救いの明けの明星にして月」たるオリガは、キリスト教の熱烈な使徒として、グラディーミルの模範となり、我が国における真の信仰の勝利の露払いを成したのである。

(土谷直人訳)

19世紀の著名な『ロシア帝国史』を著わした歴史家のカラムジンは、主としてネストルの『過ぎにし年月の物語』を参照しながら、オリガ大公妃の事績を以上のように顕彰した。要点は、

---

<sup>2</sup> Карамзин Н.М. История Государства Российскаго. Томъ 1. С.Петербургъ, 1892. С. 118-119.

1. ドレヴリャーネ族復讐後の平和の維持
2. 内政における巧みな行政手腕
3. 神聖ローマ帝国に対する外交的勝利 大使館の設置と友好同盟の提案
4. ロシアへのキリスト教の導入の決定的役割

を称揚したものであることが分かる。息子との生涯の最期の時点での関係は微妙なものが感じられるが、「彼女は異教的迫害を行うことを禁じ、自分の選んだ場所で、キリスト教の僧によって葬られた」という部分に彼女の強烈な意思が感じられ、それを評価称揚しているカラムジンが感じられる。Г. Семиграский の«Родовитого варяга готовят к погребению»などによると、リューリク朝の初期は、随分豪勢な埋葬である水葬を行っていたと推察されるが、オリガはこの伝統には従わなかったのであろう。

最後に日本の聖徳太子に対する哀悼の文章を読んでみよう。

聖徳太子は、碩学、梅原猛の『隠された十字架 法隆寺の謎』が論証している様に、極めて不遇の生涯を送ったが故に、「聖徳」という諡号をもらい、彼の一族の非業の最期を悼んで、藤原氏が法隆寺を建立した、という。この論考に、筆者も概ね同感する者である。また、古事記、日本書紀を通じて最大の悼みの言葉が捧げられているのは、やはり誰であろう、聖徳太子である。例えば、古代天皇のうち最大の専制君主であったと思われる、天武天皇の崩御に関しても、「丙午（九日）に、天皇の病、遂に差えずして、正宮に崩りましぬ」のように誠に簡潔で素っ気ない記述を『日本書紀』はしている。これに反し、聖徳太子の崩御の様は、恐らく一族子孫絶滅という不遇を送った太子一族に対する霊を慰めんとするが如し、と言えよう。

『日本書紀』を実際に纏めたのは、二人の中国人音博士続守言と薩弘恪と、新羅に留学してきた山田史御方、それに紀朝臣清人、そして最後に和風潤色・加筆を加えたのが三宅臣藤麻呂であると、森博達と言う。これによれば、山田史御方によって、倭音により和化漢文で、卷第二十二 推古天皇条は書かれたことになる。<sup>3</sup>

まず、『日本書紀』卷第二十二 推古天皇在位二十九年の条を読んでみよう。

二十九年の春二月の己丑の朔みづのと巳に、半夜に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の時に、諸王・諸臣及び天下の百姓、悉に長老は愛き児失へるが如くして、塩酢の味、口に在れども嘗めず。少幼は慈の父母を亡へるが如くして、哭

---

<sup>3</sup> 森博達 『日本書紀の謎を解く』 中公新書、1999年。

き泣つる声、行路に満てり。乃ち耕す夫は耜を止み、春く女は杵せず。皆曰はく、「日月輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか恃まむ」といふ。

是の月に、上宮太子を磯長陵に葬る。是の時に当たりて、高麗の僧慧慈、上宮皇太子薨りましぬと聞きて大に悲しむ。皇太子の為に、僧を請せて設斎す。仍りて親ら経を説く日に、誓願ひて曰く、「日本国に聖有す。上宮豊聡耳皇子と曰す。固に天に縦されたり。玄なる聖の徳を以て、日本の国に生れませり。三統を包み貫きて、先聖の宏猷に纂ぎ、三宝を恭み敬ひて、黎元の厄を救ふ。是実の大聖なり。今太子既に薨りましぬ。我、国異なりといへども、心断金に在り。其れ独り生くとも、何の益かあらむ。我今年の二月の五日を以て必ず死らむ。因りて上宮太子に浄土に遇ひて、共に衆生を化さむ」といふ。是に、慧慈、期りし日に当りて死る。是を以て、時の人の彼も此も共に言はく、「其れ独り上宮太子の聖にましますのみに非ず。慧慈も聖なりけり」といふ。<sup>4</sup>

中国の歴史学の開祖とも言われる司馬遷は、『史記』の対匈奴対策で、大変な業績を残した衛青や霍去病ではなく、むしろ戦術戦略的に失敗し不幸な最期を遂げた李広将軍に温かい賛辞の言葉を呈している。（世界文学大系『史記 列伝』筑摩書房、287 頁。）そのような例に肖ったわけでもないと思われるが、『日本書紀』で、上文に見られるような言葉を、聖徳太子は奉られている。天智天皇や天武天皇より、いやどの天皇よりも多くの言葉が費やされて、悼まれていると言って良いであろう。ここでは省略したが、かの有名な、若くして、すでに十人もの人々の訴えを同時に理解し処理したという伝説の他にも、片岡山での行き倒れた人間を、聖人と喝破する点など、聖徳太子の奇蹟的な能力、予言者的能力を示す逸話に事欠かない。年代記作者は歴史家であることを止めて、宗教的予言者であるかのごとく振る舞っている。実在の聖徳太子以上に、彼に業績が付加されて、太子像が巨大化したことは否めない。が、それでも何らかの大和朝廷天皇家での大いなる業績はあり、歴代の優れた統治者、摂政、政治家の典型的な理想像を『日本書紀』の編纂者はここに示して置きたかったのであろう。

山田史御方は、（煩雑に渡るので、ここでは一一の引用を差し控えるが）勿論多くのレトリック、修辞を中国の典籍から借用しているので、真に日本の情緒を表現している部分は何れ程かを言う事は難しい。しかしながら、日本人には、中国の歴史書と違って、「情有るがごとし」という表現が多いということであるが、この文章にも感情行動を表し、情動心理を表す表現が多いと思われる。

<sup>4</sup> 坂本太郎他校注『日本書紀（四）』岩波文庫、2001 年、134-136 頁。

テキストに描かれた歴史的事件の継起は、ここに掲げた順番と逆で、聖徳太子が 6 世紀、オリガ大公妃が 10 世紀、ボレスワフ勇敢王が 11 世紀である。

聖徳太子の崩御に対しての、(諸王・諸臣及び天下の百姓)、皆曰はく、「日月輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか恃まむ」といふ、という部分は、例えば、ボレスワフ勇敢王の崩御に対しての第7連、

ああ！ ああ！ ボレスワフ王よ！

何故に、我らを見捨て給う。

神よ！ 何故にかくなる王に

死を許され賜うや？

何故に一緒に我らすべてを

連れ給わずや。

に、通うところがあるう。

詳細なテキスト分析、語法の面白さ、三作品の対照表現関係は省くが、最後に一言で纏めれば、ガルス・アノニムスは、王の死の悲しみに参加する、王の一族、貴族騎士階級から庶民に至る迄の国民の描写に力点があり、カラムジンは、オリガ大公妃の統治業績の歴史的意義を述べることに力点があり、日本書紀の作者は、天皇の事績を越えた存在、古代日本の為政者としての理想像、聖徳太子の「大聖人にして予言者」の像を描くことに力点があったと言って良い。

これをもって、木村彰一教授の徳を慕い、ロシア学、ポーランド学に導かれた学恩に感謝し、謹んで教授の徳を偲ぶ一文にかえたい。

2015 年 1 月

日本スラヴ学研究会会長

土谷直人